

万年筆の旅



吉村昭
記念文学館

準備室ニュース

vol.4

平成27年3月31日発行
登録番号(26)0124号
編集・発行／荒川区
問合せ／
荒川区地域文化スポーツ部
複合施設準備室
〒116-8501
東京都荒川区荒川12-2-3
TEL.03-3802-4976

題字／津村節子氏
切絵／山崎達郎氏

施設愛称決定

「ゆいの森あらかわ」

吉村昭記念文学館が整備される複合施設の愛称が「ゆいの森あらかわ」に決定しました。

「ゆいの森あらかわ」は、「人と人、本と人、文化と人が結びつき、楽しみ・学び・安らげる、豊かな森のような施設」となるよう名づけています。

愛称の決定に当たっては、全国から作品を募集し、応募のあった四百十九名、二百九十六作品の中から五



ゆいの森 あらかわ 外観イメージ

作品を選び、区民投票（投票数一万五千六百二十票）を行いました。この投票結果を踏まえ、選定委員会において愛称を決定しました。

選定委員としてご参加いただいた、作家で吉村氏の御令室の津村節子氏からは、この施設が「人と人が集まり新たな交流が始まったり、疎遠だった人が親交を深めたりする場になればと思う。吉村も故郷の人が交流できる施設となったら喜ぶと思う」とコメントがありました。

文学館の設置について

文学館の設置については、度々、吉村氏は望んでいないのではないかと、氏の著作『わたしの普段着』（平成十七年、新潮社）の「不釣合いなコーナー」を例に指摘されることがあります。このエッセイは、『小説新潮』（平成十四年一月）に掲載され、その後、単行本化されています。

吉村氏は、このエッセイで、荒川区立日暮里図書館内の吉村昭コーナーについて「私の死後一年ほどは、コーナーはそのまま残してもらってもよいが、その後は生原稿その他をすべて家に送り返してもらおうと思っている」と記しています。

文学館の設置については、吉村氏と西川太一郎荒川区長が相談を重ね、「区の財政負担にならぬ範囲で実施すること」、「図書館のような施設と併設すること」を条件とし、吉村氏にご承諾いただいたのは、著作の出版後の平成十八年一月でした。その約六箇月後の平成十八年七月三十一日に吉村氏が逝去されました。

このような経緯から、設置について誤解を招くことがあります。平成二十二年には、吉村氏のご遺志に沿った、図書館、子どものための施設と融合させた、（仮称）荒川二丁目複合施設内に文学館を建設する

ことが正式に決定しました。文学館の整備については、今後も、津村氏やご家族、関係者、専門家の皆様にご意見を伺いながら、開館に向けて準備を進める予定です。

二十九年春の開館に向けて

平成二十六年四月に複合施設準備室を新設し、「ゆいの森 あらかわ」は、同年十一月から建設工事に着手しました。平成二十七年には、文学館の展示工事にも着手する予定です。

平成二十九年春の開館にむけて、施設のPR等も行っており、楽しみにお待ちください。



ゆいの森 あらかわ 内部イメージ

「吉村昭記念文学館友の会」 平成二十七年三月七日に設立しました

荒川区では、吉村昭記念文学館の情報を全国に広く発信していくとともに、この文学館が、開館時に全国の皆様から吉村文学の真髄に触れることのできる場として親しまれ、地域の文化の醸成に貢献する施設となるよう支援することを目的として、「吉村昭記念文学館友の会」を設立しました。

皆様のお申込みをお待ちしております。

○設立趣意書

友の会の設立に当たっては、西川太一郎荒川区長とともに、吉村昭・津村節子夫妻と古くから親交があった作家の瀬戸内寂聴氏、本年三月七日に施設の開設プレイベントで講演をいただいた作家の逢坂剛氏（講演の内容については四ページに掲載）、そして、本文学館の開設に当たり構想段階からご尽力をいただいている跡見学園理事長の山崎一穎（かずひで）氏が発起人と

なり、友の会の設立趣意書を起草しました。

○年会費

- ・個人会員 開館までの期間は無料です。
- ・法人会員 無料です。
- ・賛助会員※ 一〇二、〇〇〇円

より

※ 賛助会員は、本会の趣旨に賛同し、寄附により活動を支援いただける個人又は法人の方を対象としています。

賛助会費は、文学館の建設費及び運営費として活用いたします。

なお、賛助会費は、ふるさと納税制度による寄附金控除の対象となります。

○会員期間

開館前の会員期間は、開館日（平成二十九年春を予定）の属する月の末日までになります。

開館後は、毎年度の末日（三月三十一日）までが会員期間になります。

吉村昭記念文学館友の会 入会申込書

1 会員区分等 (右欄の中から該当する番号を○で囲んでください) ※賛助会員をお選びいただいた方は、賛助会費の□数及び氏名の掲載の可否につきましても、あわせてご記入ください。	①個人会員 } 開館までの期間は無料です。 ②法人会員 } ③賛助会員 賛助会費 (寄附) (2,000円× □ = 円) ※本件寄附について、氏名を区ホームページ等に掲載してもよろしいでしょうか。 (はい ・ いいえ)
2 氏名 ※法人の方は、法人名及び担当者氏名をご記入ください。	氏名又は法人名 _____ 担当者氏名 (_____)
3 住所	〒 _____
4 電話番号	

○申込方法

開館後はあらためて会員を募集します。

右に掲載の入会申込書又は左記事項を記載し、以下の申込先まで郵送ください。

- ①会員区分等「個人会員／法人会員／賛助会員（賛助会員で申込みの方は、賛助会費の□数、氏名を区ホームページ等に掲載することについて可否）」
- ②氏名（法人の方は、法人名及び担当者氏名）
- ③住所
- ④電話番号

【申込先】

〒一六・八五〇一
東京都荒川区荒川二丁目二番二号
荒川区役所複合施設準備室
文学館友の会担当宛て

※ 賛助会員の会費（寄附金）は、入会申込み後、区から納付書を郵送します。

申込みに係る個人情報、友の会に関する事業についてののみ使用いたします。

次号から「万年筆の旅」は、友の会の広報誌として、会員の方を中心に配布いたします。

吉村昭記念文学館友の会設立趣意書

荒川区出身の作家・吉村昭氏は、徹底した取材と情感を抑えた文体による作品を数多く執筆し、「戦艦武蔵」や「三陸海岸大津波」などの記録文学、そして、「ポーツマスの旗」や「彰義隊」などの歴史文学の分野で我が国の文壇に確固たる地位を築きました。

吉村氏は、多感な時期を過ごした“ふるさと”である荒川区に対する強い思いを持ち続け、随筆や小説にその思いを度々記しています。

荒川区では、吉村氏の功績を後世に伝え、吉村文学を通して真実を見極める眼差しを学び、より多くの方々が文学に親しむとともに、荒川区を知り、郷土愛を育める場として、吉村昭記念文学館の検討を重ねておりました。

この度、この文学館の設置目的を十分に満たし、さらに、図書館のような施設との併設を強く望んでおられた吉村氏の御遺志を尊重し、荒川二丁目に整備する複合施設に、平成29年春、文学館を開設することとなりました。

この施設は、全ての世代が活用できる図書館と、未来を託す子どもたちの施設と文学館が融合することにより、これまでの文学館の事業だけでなく、新しい事業の展開を目指しています。

私たちは、この文学館が全国の皆様から吉村文学の真髄に触れることのできる場として親しまれ、地域の文化の醸成に貢献する施設となることを支援するため、「吉村昭記念文学館友の会」を設立します。

平成27年 3月 7日

発 起 人

西 川 太一郎
(特別区長会会長・荒川区長)

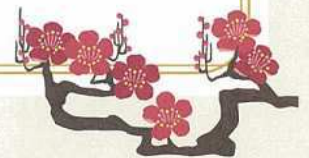
瀬戸内 寂 聴
(作 家)

山 崎 一 穎
(跡見学園理事長)

逢 坂 剛
(作 家)

《 会 員 特 典 》

	個人会員・法人会員	賛助会員
開館前	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会員証発行 ・ 広報誌（万年筆の旅）送付 	申込口数に応じて、個人会員の特典に以下の特典を追加 ①10～50 ・ オリジナルポストカード(1口につき1枚)贈呈 ・ 区ホームページに芳名掲載(希望者のみ)
開館後(予定)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会員証発行 ・ 広報誌、図録送付 ・ オリジナルグッズの購入割引 ・ 有料企画展入場料割引 ・ 講演会等の優先募集 	②60～250 ・ オリジナルピンバッジ1個贈呈 + 上記①の特典 ③260～490 ・ 開館前 施設内覧会の招待状送付 + 上記①・②の特典 ・ 開館後 オリジナルグッズ1品贈呈(予定) ④500以上 ・ 施設内への芳名掲示(希望者のみ) + 上記①～③の特典



施設開設。プレイベント

逢坂剛氏講演会

「偉大なる大先輩・吉村昭

〜日暮里の思い出〜」

日時：平成二十七年三月七日（土）

十四時三十分〜十六時

場所：サンパール荒川小ホール

挨拶：西川太一郎・荒川区長

北城貞治・荒川区議会議長

津村節子・作家・吉村氏御令室

丹呉泰健・日本たばこ産業会長

（四月より開成学園理事長）

日暮里にある開成学園の出身で、吉村氏の後輩となる作家・逢坂剛氏を講師にお招きし、講演会を開催しました。逢坂氏は、本年三月二日に、第四十九回吉川英治文学賞の受賞が決まり、講演に先立ち、区からお祝いの花束の贈呈と会場からは大きな拍手が送られました。

津村氏からは、「吉村が生前、開成は作家が少ないが、現役バリバリの作家・逢坂剛氏は、多彩でさまざまなジャンルを書いており、おれより売れていると話をしていて」と紹介がありました。また、講演会冒頭の、西川荒川区長の挨拶では、施設の愛称と文学館友の会の設立の発表がありました。



講演を行う逢坂氏

開成学園、先輩後輩

吉村氏とは十六年、年次が違い、昭和三十一年に開成学園に入学した。卒業は創立九十周年の年で、伝統があることを誇らしく思っていた。

開成の卒業生は作家が少なく、吉村氏が先輩と知り、文壇の付き合いが少ない吉村氏に、パーティーで思い切つて「先輩」と声をかけてみた。「おう。逢坂君か」と答えてくれ、その後、二、三度、声をかけた。開成では、「先輩」と呼んで恥ずかしい相手はいないので、心置きなく「先輩」と言い、「おう」と答えてもらうのが嬉しかった。

私は、吉村氏と同じように、調べて書くタイプのため、「長崎や北海道に百回を超える取材をして、何を調べたか」について、先輩と呼ぶだけ

でなく、親しく接して教えを受けるべきだったと思つている。

吉村氏のように、事実を直視し、事実以外は書かない作家が、執筆にかける取材や時間は大変なものである。この労力を惜しまない作家としての姿勢は、開成の教えにあると思う。開成では、勉強を教えるというより、事実を知るにはどう調べていくのかという方法論を学んだと思う。

近藤重蔵シリーズを書き始めた時、あるパーティーで「いい脈脈を発見したね」と吉村氏に言われたことが、印象に残っている。

名エッセイスト

『東京の下町』（昭和六十年・文藝春秋刊）の「町の正月」のエッセイは、読むたびに微笑ましく、夫婦の関係が巧まざるユーモアで書かれており、名エッセイストだとわかる。小説とは別の味わいがあり、ぜひ、読んで欲しい。

執筆の姿勢

エッセイを読むと、吉村氏の執筆に対する姿勢に感銘を受ける。

一番感心したのは、原稿の締め切りである。私は、新聞連載していた時、締め切り一箇月前に最後まで原稿を渡したら、稀有の人だと言われた。吉村氏も締め切りを守る人と知り、どのくらい余裕を持って執筆してい

るのか聞いたことがあった。その時吉村氏は、これから新聞連載が始まるという時であったが、原稿は全て書き終え編集者に渡したと聞き、絶句した。吉村氏は、締め切りを守るのは、エッセイで小心者だからと書いているが、資料が集まった時には、七割か八割は執筆が終わっていたからではないかと推測した。

吉川英治文学賞

受賞は突然の事で、対象の年齢ではないと思つていたので驚いた。受賞した「平蔵狩り」の装丁は、父親の中一弥が担当しており、親子共作で受賞した。父親も、昨年、現役最高齢の挿絵画家として吉川英治文化賞を受賞しており、二年連続での親子受賞は珍しく、嬉しかった。

今後の執筆の展望

今後は、西部小説とドイツ・ロマ派のホフマンの伝記小説、昨年、ドラマで評判となった百舌シリーズ、第六弾の発行を予定している。シリーズものは三作までと思ひ、主要人物を三作目で殺してしまつたが、強い要望があり執筆予定である。

逢坂氏の語り口が小説のように軽やかで楽しく、講演時間は、瞬く間に過ぎてしまいました。